

情報リテラシー実践Ⅰにおける授業評価の経年変化

情報教育検討部会部会長
大学教育センター教授

永井 正洋

はじめに

本稿では、2008年度から2010年度前期末に行った情報リテラシー実践Ⅰに関する授業評価アンケート(SE)の経年変化について主に報告する。

高等学校では、現行の学習指導要領が平成11年に告示され、平成15年度より実施されている。大学等高等教育機関には、これにしがたい教育を受けた学生が平成18年4月に初めて入学した。現行の高等学校学習指導要領では、教科「情報」が置かれたことが1つの特徴となっているが、先行研究では、これにより、大学入学時の学生のコンピュータリテラシーが、向上していることが期待されてきた。

そこで、筆者ら大学教育センター情報教育担当は、大学で情報教育の授業を受ける学生のレディネスがどのような状態であるのかを明らかにするために、これまで毎年、レディネス調査を4月の段階で実施してきた。結果的に多くの調査項目で向上が認められ、学生の情報やコンピュータに関して使えるという意識は、徐々に高まってきていると考えられる。しかしながら、多くの項目で未だできるという回答が全学生の50%を超えておらず、その意味であまり身に付いていないと学生は認識しているようである。更に、客観テストからは、本学は他大学と比較すると、有意に低い得点となっており、基本的な情報リテラシーを欠く状態であることが分かっている。

ここで、本学の基礎教育課程では、主に基礎・基本的な情報活用能力の育成をねらって情報リテラシー実践Ⅰを設けているが、その内容は、標準として、『情報倫理、コンピュータやネットワークの仕組み、e-mail、Web検索、文書編集、表計算、プレゼンテーション』といった学習項目から成り立っている。したがって、前述のような状態で学生のレディネスが数年間、推移していることを考えると、上記内容は適当であることが推察されるが、本稿では実際に、どのように授業が評価されてきたのか経年変化を追うなかで、基礎情報科目としての情報リテラシー実践Ⅰの有効性などについて述べてみたい。

方法

まず、アンケートの質問項目だが、共通項目が問1～8、個別質問項目が問9～12となっている。この個別質問項目は、情報教育検討部会にて設定されるが、2010年度と、それ以前とは異なっている。次に回答方法に関しては、3年間とも、eラーニングシステムを用いてアンケートを実施しているが、SEでのシステム利用のクラスの割合は89.5% (2008年)、97.3% (2009年)、97.4% (2010年)となっており、ほとんどのクラスで利用されている。また、TEについても84.6% (2008年)、96.0% (2009年)、86.7% (2010年)と同様の傾向である。

次に、3年間の授業評価アンケートの実施状況を示す(紙面の関係上、SE：学生による授業評価のみ)。

【2008年度】(SE)

実施時期：2008年7月7日～7月22日

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収数/人数：1494人/1751人 (85.3%)

方法：BlackBoard (35クラス)、マークシート(4クラス)

【2009年度】(SE)

実施時期：2009年7月6日～7月23日

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収人数/全人数：1376人/1722人 (79.9%)

方法：BlackBoard (38クラス)、マークシート(1クラス)

【2010年度】(SE)

実施時期：2010年7月9日～7月22日

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収人数/全人数：1458人/1682人 (86.7%)

方法：BlackBoard (37クラス)、マークシート(1クラス)

結果と考察

図1は、2008年度から2010年度前期末に行った情報リテラシー実践Ⅰに関する授業評価アンケート(SE)の共通項目に関する経年変化を表している(* $p < .05$, ** $p < .01$)。なお、この分析では、2009年度、2010年度は、再履修クラスと分析に同意していない学生等を除

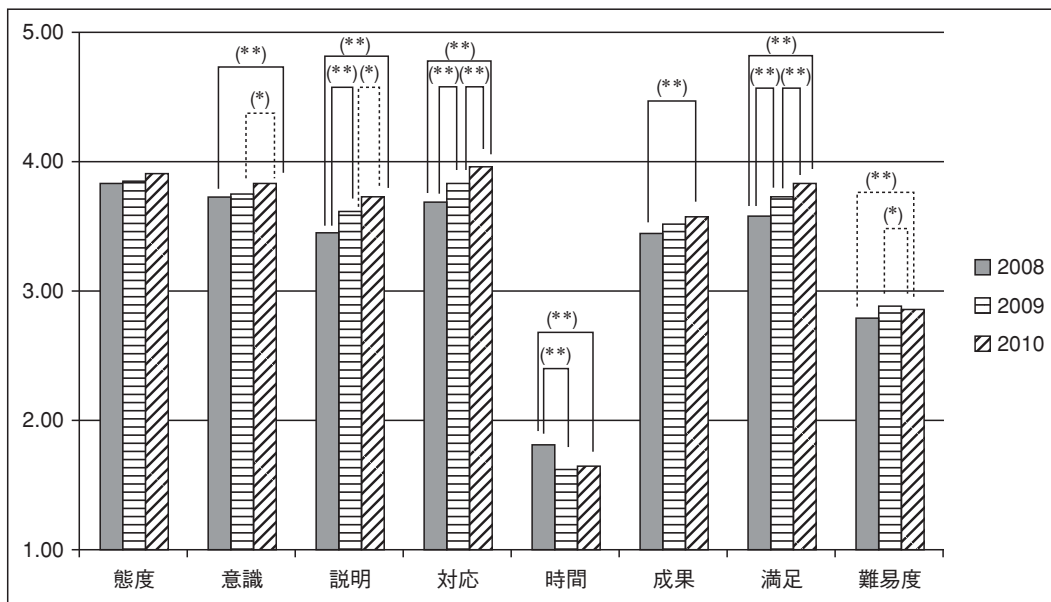


図1：2008～2010年度 SE回答の経年変化

外しており、2008年度は再履修クラスのみを除外している。

全体的に、年を追うごとに授業への意識が向上していると共に、その多くは有意な差として表出していることが分かる。具体的には、授業に意欲的・積極的に取り組んだかという「態度」と授業の目的を意識しながら学習することができたか問うている「意識」については、「意識」に関して、若干の向上が見られるものの余り顕著な動きはなく、学生の授業に対するインセンティブは、4ポイント弱という比較的、高い位置で安定しているといえる。次に、教員の学生への「説明」と「対応」に関しては、上昇傾向が顕著であるが、このことは教員の授業に対する意識の改善と教育技術の向上によるものではないかと推察する。これと比べ、授業によって、シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できたとする「成果」に関しては、若干、有意差が見られるものの、緩やかな伸びとなっており、加えて、他の項目より低めのポイントとなっているので、結果として身についた知識やスキル等の情報リテラシーに関して、若干、自信のなさが表出していると考えられる。更に、図2は、2009年までの、コンピュータリテラシーの定着に関する意識を表しているグラフであるが、前半2年（2006、2007）より、後半2年（2008、2009）の方が、低い傾向にあることが分かる。

このことは、コンピュータ教室のOSや授業用ソフトウェアの更新、また、利用教室の増加に伴う、一時的な学習環境の違いが要因として推察されるが、いずれにしても、注視し、その要因を調べ検討する必要がある。

と考えている。

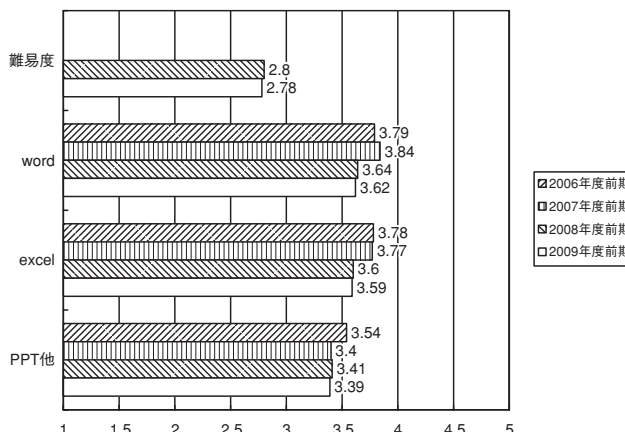


図2 コンピュータリテラシーの定着に関する意識

次に、難易度については、3ポイントを基準として、適切な難易度としていることを考えると、現在の基礎・基本的な学習内容が、学生は妥当であると回答していることが分かる。反面、課題としてあげられるのは、授業時間外での学習である。これはどちらかというと年々、下がり気味の傾向となっており、単位制度の実質化の観点からも、何らかの対策を検討する必要がある。

最後に満足度に関しては、有意に回答が上昇しており、問題ないと考えられるが、今後は、このことが、先にあげた情報リテラシーや授業時間外学習の向上につながるよう手立てを考えたい。